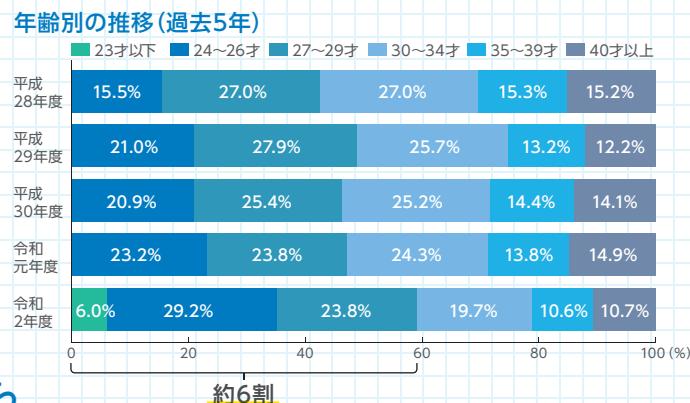


20代が合格者の6割を占めた令和2年度試験！

若年層の受験者は年々シェアを拡大してきており、これに伴って合格者も比率を伸ばしていました。近年のシェアの推移をみると、平成28年度でこそ20代は4割程度でしたが、令和2年度では受験機会の増加・早期化を図った新制度が推進力となり、約6割を占めるに至っています。



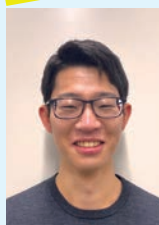
令和2年度試験から「実務経験0」でも受験が可能に！

改正前	改正後
受験資格	受験資格
大学卒業後、実務2年以上	大学卒業
3年制短期大学卒業後、実務3年以上	3年制短期大学卒業
短期大学・高等専門学校卒業後、実務4年以上	短期大学・高等専門学校卒業
2級建築士、実務4年以上	2級建築士
建築設備士、実務4年以上	建築設備士
	免許登録要件
	実務2年以上
	実務3年以上
	実務4年以上
	2級建築士として実務4年以上
	建築設備士として実務4年以上

※上記は一例です。修めた指定科目の単位数に応じて、必要な実務年数が異なります。
※上記以外に1級建築士は国土交通大臣が受験資格要件と同等と認める方に受験資格・免許登録要件(所定の年数)が与えられます。

大学生/短大生/高専生は卒業したら受験できる
院生1年目に合格すれば有利に就職活動ができる
2級建築士/建築設備士取得者はすぐに受験できる

在学中に合格！



五十嵐 直人さん
(大学院在学)
大きな建築をつくるためには1級建築士でなければいけないため、建築を学びはじめてからは1級建築士の取得を目標にしていました。建築士法の改正に伴って学生のうちに受験できるようになったことと、コロナ禍が勉強をする契機と前向きにとらえて勉強しました。

受験資格を得て挑戦！



吉村 威吹さん
(構造設計事務所勤務)
受験資格を法改正により得ることができたため、時間のあるうちに取ってしまおうと考えて受験を決断しました。不安なことは特になかったですが、早く資格勉強を終わらせたい焦りはありました。

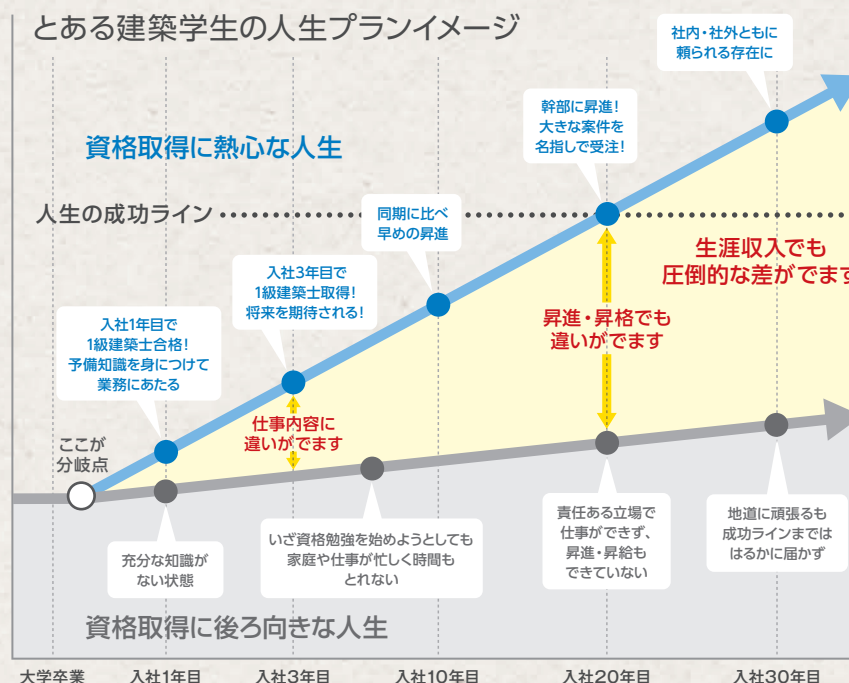


学生はライバルに先んじて 在学中から建築士試験 対策をスタートしよう



就職活動から差がつく！

左ページの建築士試験制度の変更は、企業側も周知の事実。当然、資格取得に向けた学習意欲を持った学生とそうではない学生とでは、選考時から差がつくのは明らかです。経験がない社会人一年目に、仕事で成果をあげるのは難しくても、建築士合格という形で成果をあげることはできるという考えをもった企業も増えています。また、院生であれば1級建築士に合格した状態で就活に臨むことができますが、その優位性については言うまでもありません。



昇進が早く 生涯年収で 圧倒的な差

資格を取得すると、多くの企業で資格手当が支給されるため、収入は確実にアップします。さらに、資格の有無が昇進・昇格の条件となっているため、早期に資格を取得することで出世も早まり、そのぶん給料も底上げされます。入社1年目で1級建築士に合格すれば、無資格のままと比較した場合、生涯収入では、圧倒的な差となってあらわれます。

社内外から 大きな信頼を獲得できる

建築関連の最高峰資格として広く知られている1級建築士。若くして取得していれば、社内外から「優秀な人材」として無資格の実務経験者よりも絶大な信頼が得られるのは確かです。1級建築士として大きな仕事を任されることになりますが、その分、大きな責任を背負うことにもなります。でも、それ以上に大きな「やりがい」を得ることができるでしょう。

